

2022年1月30日（日）

旭東教会  
創立119周年記念礼拝説教

ヨハネによる福音書 13章34節～35節

コリントの信徒への手紙 二 5章17節～19節

「共に喜び 共に涙する」

関田 寛雄 先生

日本基督教団 神奈川教区巡回牧師  
青山学院大学名誉教授

皆さま、おはようございます。「共に喜び共に涙する」という説教のお題をいただきました。「共に」というところに大変アクセントがあるわけですが、今この世界は「共に」ではなく、お互い自分の国だけを、自分だけを大事にするという風潮が広がっています。大きく豊かな国同士が、大変な対立をもたらしてしまい、「共に」という世界から本当にどんどん離れていっている。そしてお互いに力のある兵器を作り、音よりも早く飛ぶミサイルを作る。そんなものを作って本当に使うのかと思うようなものを、

お互いにもっと強く、もっと大きくもっと効果がある兵器を作る、そういう競争が始まっている。

こんな時に、新しいウィルスのパンデミックが広がって、世界中が本当に困っています。自分の国さえよければという主張が今でもなされていますが、それは通じない。どこもかしこも、みんな苦しんでいる。このパンデミック、このコロナの襲来によって、本当にあらゆる国々が苦しんでいる。

こういう時にもう一度私たちは、本当に「共に生きる世界」を大きな国に期待できなくても、一人ひとりが確信をもって作っていかなくてはな  
いか、というのが私の今日ここに参りました思  
いです。

\*

旭東教会は来年、120周年という大変素晴らしい歴史を迎えようとしています。しかしこのウィルスの広がっている時に、私をわざわざお呼びくださって集会をするということは、森先生は大変な冒険をしていらっしゃるのではないかと、ハラハラしていたところです。でも神さまのお導きだと思ひまして、やって参りました。

「共に生きる」ということが本当にできるためにはどうしたらいいかと言いますと、まず「一人になる」ということから始めなければならないと思います。「共に生きる」ということは、ただ仲良くなって、それこそ同じ趣味や楽しみを持って何でも一緒にすることではありません。若い学生さんたちの中には、トイレまで一緒に行くという「トイレ友達」というのがあるそうですが、そんなふうに仲良くすることではないのです。

本当に責任的に主体的に共に生きるために

は、まず自分自身一人にならなくてはならない。私の尊敬しております瀬戸内寂聴さんが亡くなりましたが、あの方がいつも言っていることは、「人は一人だ」ということです。あの方の人生を振り返ってみますと、本当にご自身が一人で世界を生きてきて、色々な恋愛の重なりごとが続いたようですが、その中で結論としてたどり着いたのは、人は一人である、ということです。寂聴さんの切実な声が、私に響いてまいります。

親子でありましても、夫婦でありましても、兄弟でもありましても、人生どこかの段階で、「私は一人だなあ、本当に一人だなあ」という瞬間がやってくるのではないのでしょうか。私自身、実は今、腎臓の疾患があって、週3回透析の病院に通っています。今年で3年目になります。病院で一回4時間、血液がぐるっと回って、よごれた血液から水を抜く作業をします。これは、どんなに仲が良くても私の奥さんに代わってもらわなければならないのです。一人、自分の

血液を眺めながら、毎回 1000cc、2000cc と水を抜くのです。このように、自分は独りぼっちだなあ、女房にしても子どもにしても代わってもらえない、そういう瞬間が皆さんお一人おひとりにあるのではないのでしょうか。

でもその時に、私たちは聖書の声を聴くのです。その独りぼっちだという時にこそ、目に見えないけれども、神さまのお子さまイエスさまが傍らにいらっしゃる。礼拝の中で賛美歌（「やさしい目が」）を歌いましたが、イエスさまが見ていてくださる、イエスさまが導いてくださるというイエスさまの存在というのは、一人になってこそ、深く深く知ることができるのです。

\*

先ほど、「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という聖書箇所(ヨハネによる福音書 13 章 34 節)を読ん

でいただきました。独りぼっちの時にイエスさまの愛を受けて、目には見えなくても聖書を通して響いてくるイエスさまの愛を感じる時に、そこからイエスさまと共にそしてイエスさまの言われるように、人間と共に生きていこうということが始まるのです。一人になって、イエスさまの声を聴きイエスさまの愛を知って、それならば仲間と一緒に助け合って行こうとする、「共に」という世界が開けてくるのではないのでしょうか。

責任的に主体的に「共に」生きる。流されて一緒にいるとか、仲良くなっていればいいというのではなく、本当に「共に」ということは、人が泣いている時に一緒に泣くのです。あるいは喜んでいる時に一緒に喜ぶのです。そういうところに、本当に「共に」という世界が開かれてくるのです。

\*

先ほどパウロの手紙を読みましたが、そこにはイエスさまがなさった和解ということが、パウロの言葉で書かれておりました。神さまがイエスさまを通して、この世の罪を問うことなく、神さまとこの世界とが一つになる。どんなにこの世界が見苦しくてきたなくても、罪深くあっても、イエスさまを通して神さまはこの世界を肯定していらっしゃる。認めていらっしゃる。良しとされている。そこに、どんなに歴史的に相争う国々がやってきても、イエスさまのお働きによって、神さまはこの世界を良しと認めていらっしゃる。

ですから、今の対立状態は本当ではないのです。世界全体が、どの民族もどの国もお互い助け合って生きるというところにこそ、本当の世界があるのです。それを神さまが約束していらっしゃる。どんなに暗くても、どんなに絶望的に見えても、神さまが良しと言って、和解して

くださっているこの世界を大事に生きていきましょう。

\*

今、コロナのウィルスが広がって大変です。暗いです。でも、皆さん、朝顔が一番先に咲くのは夜中なのです。太陽が昇って咲くのではなく、朝顔は光を待ちながら闇の中で咲くのです。そういう朝顔を見習っていきましょう。

この暗い世界にも、必ず光がやってくる。神さまの国がやってくる。共に生きる世界が必ず開ける。そのことを思いながら、かつてあるところに、次のような俳句を書いて送ったことがあります。

「朝顔は 光を待ちて 闇に咲く」

今は闇かも知れません。けれども、この教会



から発するイエスさまの光によって、闇の中でも花を咲かせていきたいと思うのです。ですからパウロも言っていますように、神さまがこの世を良しとして、私たちと共に神さまがいらっしゃる。だからこそ、お互いに仲良く共に生きる和解の務めを営もうではないかと。共に生きる世界、和解の世界は、一人になってイエスさまと巡り会い、イエスさまの愛によって豊かに広がってくるのです。

この共に喜び共に悲しむという世界は、イエスさまご自身が歩まれた世界です。イエスさまご自身は、本当に悲しんでいらっしゃるのです。

\*

その話が、ヨハネによる福音書の 12 章のところにあります。ラザロという人が病気で亡くなった。マルタとマリアの姉妹が頼んでも頼んでも、イエスさまは来なかった。とうとうラザ

口は死んでしまった。弟のラザロは死んでしまった。姉妹は、「どうしてイエスさまは来てくださらなかつたのですか」と言った。その時、悲しんでいるラザロの友人たちや姉妹たちを見ながら、イエスさまも泣いていらっしゃるのです。そのことを、新共同訳の聖書では、一言「イエスは涙を流された」と書いてあります。端的には、「イエス泣き給う」です。「イエス泣き給う」ラザロという愛する兄弟を亡くしたマリヤは悲しんでいる。この悲しみに共感して、イエスさまが泣いていらっしゃる。泣く者と共にイエスさまが泣いていらっしゃるのです。

\*

喜ぶ者と共に喜ぶイエスさまもいらっしゃいます。その例が、ルカによる福音書 19 章のザアカイという税金取りの話です。

当時のユダヤの社会では、税金はみんなユダ

ヤ地方を支配していたローマの国に持っていかれてしまいます。だから、自分たちを支配しているローマのために税金を取る税金取りは、ユダヤ人としてけしからんというわけです。税金取り、取税人というのは、本当にユダヤ人の中で憎まれて軽蔑されて差別されていた人たちなのです。普通の人にはなかなか税金取りにはなりません。憎まれるからです。

ザアカイという人は、背が低かったと書いてあります。背が低かったということは、あるいは一種の病気を持っていたのかもしれませんが。ともかく、人の嫌がる仕事をザアカイはしていたようです。仕事がなく、そうせざるをえなかったのかもしれない。人の嫌がる仕事をしていたので。

そういうザアカイ。イエスさまがおいでになるといっているので、エリコの町でイエスさまを見に出かけたわけです。みんなの前に出ようとして

も、みんなから疎まれてしまう。前に出るな。後ろに下がれ。ザアカイは皆から押し出されて前に出られない。背が低いから。なにくそと思ってザアカイは、木の上のにのぼって、上からイエスさまを見ようと思いました。背が低いからです。そこにイエスさまがおいでになった。

ザアカイは木の上に立っています。イエスさまは、下からザアカイを見ていらっしゃる。疎まれて差別されて嫌がられている人間ザアカイ。そのザアカイに向かって、イエスさまは下から、「ザアカイよ、急いで降りてきなさい。降りてきなさい。お前は背が低いかもしれない。だけど、背が低くても、あなたは自分の足で大地を踏んで生きていきなさい。自分自身を生きていきなさい。急いで降りてきなさい」 そう下からイエスさまは言われた。

これは聖書の中では珍しいことなのです。だいたいイエスさまというと、私たちは上を見る

のではないででしょうか。ここではイエスさまは下にいらっしゃるのです。ザアカイが上にいるのです。イエスさまはなんとおっしゃったかというと、「今晚、私はお前のところに泊まるつもりだよ。人から差別されているお前のところにね。私がお前のところに泊まるんだよ」これは、元の言葉では、「泊まらなければならないんだよ」と書いてあるのです。「エリコの町で泊まるとすれば、お前のところしかないんだよ」そんなふうに、ザアカイのことをイエスさまは見ていらっしゃる。そして下から、「自分自身にもどきなさい」と言われる。

\*

ザアカイは、イエスさまを迎えて、どんなに喜んだことでしょう。イエスさまはそこで「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子どものなのだから」と言われたのです。これをイエスさまは、ニコニコ笑いながら言われ

た。ザアカイは喜んで降りてきて、「私は、これから変なことをしたらちゃんと償います。4倍にして返します。貧しい人々にちゃんと財産を配ります」と言った。自分中心だったザアカイが、隣人や貧しい人々を顧みる人になったのです。イエスさまの愛を受けて、ザアカイは変わったのです。

\*

本当にイエスさまが私のところへ来てくださる。泊まってくださる。一緒に食事ができる。なんと嬉しいことかというザアカイの喜びを、イエスさまご自身が喜んでいらっしゃるので、「救いがこの家を訪れた」。おそらく、この時のイエスさまは、ニコニコ笑いながら、ザアカイにこうおっしゃったのだと思います。

このように、イエスさまというお方は、共に涙し、共に喜ぶという世界をご自身が生きてい

らっしゃるのです。

\*

ザアカイを下から招くイエスさまということに関連して、もう少しお話したいと思います。昔、芥川龍之介という人が『蜘蛛の糸』という小説を書きました。子どもの本の中に出てきて、今でも忘れられません。

カンダタというあらゆる罪を犯してきた人間が、地獄に落ちていく。このカンダタが、たった一つだけ良いことをしたことがありました。森の中で蜘蛛の子を見つけて、踏んづけようと思った時に、待て待て、蜘蛛も命があるのだから踏んづけしないで助けてやろうと、蜘蛛の子を木の葉っぱに乗せてやったのです。その一つのことを、お釈迦さまは覚えていらっしゃった。地獄の血の池の真上が極楽のハスの池です。お釈迦さまがそこから眺めて、血の池の中であご

めいているカンダタを見て、蜘蛛の子を助けた、その一つのことために極楽に連れて行ってやろうとお思いになった。そしてお釈迦さまは、蜘蛛の糸をすーっと降ろした。血の池の真っ暗なところに、銀色に光る蜘蛛の糸が降りてきた。これにつかまれば極楽に行けると思ってカンダタは、必死に登りました。一生懸命登っていくわけです。

しばらく登ってみると、同じ地獄にいる有象無象が、後から続々と登ってくるではありませんか。カンダタはその時に、「なんで登ってくるんだ。この糸は、俺の糸なんだ。俺が極楽に行くための糸なんだよ。降りろ、降りろ」と叫んだのです。その時に、プツッと糸が切れて、もんどりうってカンダタは、地獄に戻ってしまいました。そのいきさつを極楽の蓮の池から眺めていたお釈迦さまは、悲しい顔をして散歩を続けられた。極楽が、ちょうど正午になって、ポンと蓮の花が咲きました、と龍之介は結んでいま



す。仏教にはもちろんもっと人を助ける話が出てくるのですが、これは芥川さんの仏教理解です。

お釈迦さまとカンダタの場合を、イエスさまとカンダタの場合で振り返ってみたらどうなるでしょうか。使徒信条という大事な信仰告白の中に、イエスさまは「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり」と書かれています。イエスさまは、陰府にくだっている。地獄にくだっている。イエスさまは、下から招くのです。

「カンダタよ、お前、救われたいなら、その系を放せ」

「系を放したら、地獄に落ちますがな」

「お前、私を信じるか」

「はい、信じたいと思います」

「そしたら放せ」

でもカンダタは、なかなか放せない。

「この系は、俺の系だ。俺の救われるための

この糸を放せるものか」

イエスさまは、下から、

「カンダタよ、その手を放せ。手を放せ」と言われる。カンダタは疲れてしまって、糸をもうつかめない。

もう仕方なく「イエスさま、助けてください」と言って、手を放すのです。わあーと、カンダタは落ちていきます。地獄に落ちた。けれども、カンダタは、地獄にいるイエスさまの手の上に落ちた。そして、イエスさまと共にカンダタは、天国に召しあげられていった。これが、関田版の蜘蛛の糸の話です。

\*

下から招かれるイエスさま。降りてこい、背伸びするな。高い所に登って人を見下すのではなく、大地に降りて、自分の足で、自分自身になって、どんなにマイナスを背負っていても、

自分自身になりなさい。マイナスを引き受けなさい。そこからプラスの世界が始まるのだ。

そんなふうにして、イエスさまご自身が、ラザロの場合には共に涙を流し、ザアカイの場合には一緒に喜ばれた。この暗い世界にありましても、共に生きる道を探り求めていこうではありませんか。

\*

お祈りします。恵み深い主なる神さま。今日は旭東教会にお招きいただきまして、尊いイエスさまのことにつきましてお話できましたことを感謝いたします。

来年は 120 周年という大切な時期を迎えます旭東教会。どうかこの地にありまして、地の塩、世の光としての働きができますように。森先生はじめ、皆さんご一同が結束して、協力して、あの闇の世界になおかつ光を待ちながら咲く朝

顔のように、一人ひとりが、イエスさまのお力にすがりながら、励まされながら、共に生きていく世界を作っていくことができますように。

そのことが、世界全体が共に生きる平和な世界になっていく出発点になります。主イエスさま、どうぞお一人お一人を力づけ、励まし導いてくださいますように。

イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン

\*

※文字起こしの奉仕者

旭東教会

西 高広（にし たかひろ）・佐藤 寿子（さとう ひさこ）

森 言一郎（もり げんいちろう）

## 付録

緑の牧場 48号 2022年6月26日 発行

### 関田寛雄先生 ご紹介

牧師 森 言一郎

今回、巻頭に説教を掲載させて頂いた関田寛雄先生のことを私が初めて知ったのは、1989年に日本聖書神学校に入学した頃のことです。当時、寮の先輩から「あなたの実存はどこにあるのか」「お前の現場はどのような所なのだ」と問われて、ぼんやり考えてしまう私だったことを記憶しています。その後、私の「実存」や「現場」ということを求めて行く上で、多くの示唆を頂き、自分自身で悩みながら求め、生きて行く筋道を、折々に示して下さったのが、関田寛雄という存在だったのです。

私は日本聖書神学校に在学中、関田先生の説教、聖書解釈学の講義に出席しました。今も当時もまったく変わりませんが、その謙虚さ、学問的な深さと実践の一致と誠実さ、いと小さき者とされた方々に寄り添い、断片にしか見えない出会いを尊ばれる生き方、フーテンの寅さんを愛するお姿から多くを学びました。牧師になってからも「伝道・牧会する」とはどういうことなのかを考える上で、遠くに居られても変わることなく、先

生で在り続けて下さった存在だったと思っております。

1月29日(土)の夕方、JR岡山駅に関田先生を迎えに車で出掛けました。西大寺に向かう車中、助手席に座られた関田先生は、何十年か前に、ある神学大学への入学を志した若者との関わり、止むに止まれぬと思われるようなご自身の決断。その後の傷、痛み、破れについてお話を始められました。有難い時間でした。神学校の教室での牧会学の授業のような時間でしたが、「先生」として、というよりも、「友」としてお話下さったのかも知れません。私が関田先生に初めて出会ってから30年が過ぎているのですから、いつしか関係に変化が生まれても不思議ではありません。

2022年1月30日は旭東教会創立119周年記念礼拝でした。その日の説教者、そして午後の講演者として関田先生はお出で下さったわけですが、関田先生、この時93歳です。新幹線から小さなリュックを背負って降りてこられました。歩幅はだいぶ狭くなられ、ゆっくりと歩かれました。しかしそれ以外は、本当に驚くほどしっかりと居られ、側に居て、ときに眼光の鋭さを感じたものです。道々お話を伺った中で、コロナ禍の

厳しい事情のみならず、先生の体調はある意味奇跡的に守られて、旭東教会にお出で下さったことを知りました。週に三度の透析のことは伺っていましたが、半年ほど前には、腹水三升を抜くために入院されたとのこと。命に係わるような厳しい事情があったにも関わらず、その後、不思議な回復と一定程度の健康が維持されてのご奉仕だったのです。

日本のキリスト教の世界で、関田先生は「説教学の先生、実践神学者」として知られている方です。青山学院大学にまだ神学科があった頃はそこで新約学を教えておられました。神学科の理不尽な廃科後も、強い意志をもって、引き続き青山学院に留まり、一般の学生さんにキリスト教を教えられました。あの、黒人解放運動で知られるキング牧師との手紙による交流をお持ちの、国内では稀有の方です。そして、川崎市の「土手下朝鮮」と呼ばれる、多摩川の河川敷に必然を感じ取られて川崎戸手伝道所（現在は「教会」）を開拓された、二足のわらじを履く牧師でもあります。さらに、日本各地にある神学校・神学部では、長年、説教学を中心に教鞭をとられ、伝道者育成にも仕えて来られました。それも、教派を超えてのご奉仕でした。

現在も、日本キリスト教団神奈川教区の巡回教師をされています。神奈川教区内にある小規模の伝道所が確か七つあると言われたと思いますが、日曜ごとに、各地の伝道所の礼拝に出席して居られるそうです。わずか数名の礼拝、ということも少なくないとお聞きしました。ご自宅のある千葉県大網白里市から、バスに乗り、電車を乗り継ぎ、土曜日の夕方には神奈川県川崎市駅前にあるビジネスホテルにお泊まりになり、日曜朝 10 時過ぎの礼拝に間に合うようになさっているとのこと。先生ご自身に与えられている使命、神さまからの召命を強く自覚しておられるからだと思います。本当に頭がさがります。

元々、教会では、一年前の 118 周年記念礼拝にお迎えしようと計画していたのですが、コロナの事情で一年遅れとなりました。関田先生、旭東教会には 2015 年 11 月 22 日にもお迎えしましたので、今回が二度目の来会でした。今回の説教も珠玉のものです。とりわけ、ウクライナへのロシアの侵攻直前の世界の文脈も心の片隅にとめて読んでみますと、講壇から語られた内容の奥深さがじわりと迫ってきます。私は礼拝堂最前列に座り説教を聴いていたのですが、聞き逃していたこと、理解できていなかったことが多々あることに気づかされた次第です。



当日の説教は時間にして 30 分程でしたが、ここには、今後の私たちの人生を深め、福音に仕え、教会形成に励み、伝道していく上で、宝物のような言葉の断片が散りばめられています。皆さま、どうぞ味読して下さい。何度も読み返して下さい。その都度、感じるものが違うはずです。やさしいけれど不思議な励ましを受けることでしょう。そして、大変ではあるけれど、生きることへの前向きな希望を頂けます。それが、この度『緑の牧場』の巻頭に置かせて頂いた最も大きな理由です。(了)